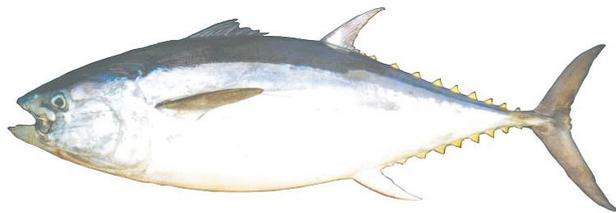


ミナミマグロ

Southern Bluefin Tuna, *Thunnus maccoyii*



管理・関係機関

みなみまぐろ保存委員会 (CCSBT)
 大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)
 インド洋まぐろ類委員会 (IOTC)

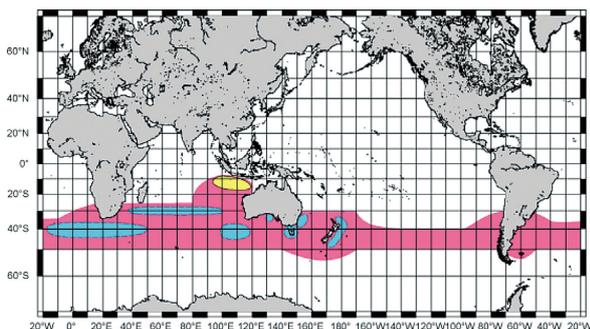
最近一年間の動き

CCSBT の第 20 回年次会合 (2013 年 10 月) は、2014 年漁期の TAC を予定通り 12,449 トンとすることを確認した。この TAC は、第 18 回年次会合 (2011 年 10 月) において管理方式 (漁獲データなどの資源指標から TAC を自動的に計算するルール) を用いて計算されたものである。また、第 20 回年次会合では、科学委員会が勧告した管理方式の計算結果を踏まえ、2015 ~ 2017 年漁期の TAC を毎年 14,647 トンとすることに合意した。ただし、2016 年及び 2017 年漁期の TAC については暫定合意とし、2014 年に科学委員会が実施する資源評価の結果等を踏まえ、第 21 回年次会合 (2014 年) において再度確認することとした。なお、2012 年の総漁獲量は 10,059 トン (表層及びはえ縄漁業の合計) であった。

- 生物学的特性**
- 寿命 : 25 歳以上、耳石での最高齢は 45 歳
 - 成熟開始年齢 : 8 歳以上
 - 産卵期・産卵場 : 9 ~ 4 月、インド洋東部低緯度域
 - 索餌場 : 西風皮流域 (南緯 35 ~ 45 度の海域)
 - 食性 : 魚類・頭足類
 - 捕食者 : まぐろ・かじき類、さめ類、海産哺乳類

利用・用途

刺身・寿司



ミナミマグロの分布 (赤)、漁場 (青)、産卵場 (黄)

漁業の特徴

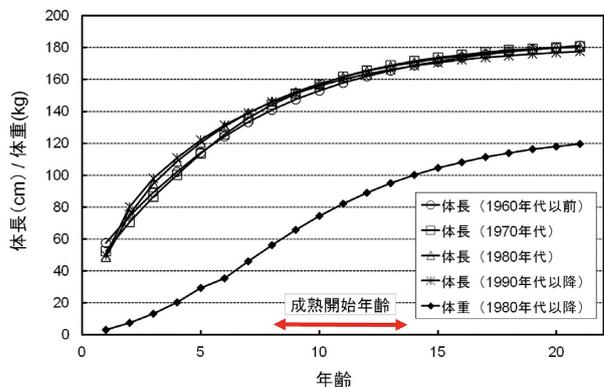
表層漁業 (主にまき網による) とはえ縄漁業で漁獲される。表層漁業はオーストラリア沿岸で 2 ~ 4 歳を中心とした小型魚を漁獲しており、近年はそのほぼ全てが蓄養用種苗となる。3 歳以上の小 ~ 大型魚ははえ縄により、公海域では日本、台湾、韓国が、沿岸域ではニュージーランド、オーストラリア、インドネシアが漁獲している。インドネシアの操業海域は産卵場と重複する。

漁業資源の動向

表層漁業、はえ縄漁業とも 1950 年代初めに漁獲を開始した。表層漁業の漁獲量は 1982 年に 21,500 トンに達し、その後は自主規制により減少したが、1990 年代中頃から蓄養用種苗を得るため漁獲を再び伸ばし、近年は年間約 4,000 ~ 5,000 トンを漁獲している。はえ縄漁業の漁獲量は 1961 年に約 78,000 トンに達したが、産卵場と小型魚が多獲される海域での日本船の操業自粛、TAC 規制等で徐々に減少した。その後、はえ縄の漁獲量は、1989 ~ 2005 年は 8,000 ~ 14,000 トンの間で維持されてきたが、2007 年漁期の TAC 削減以降に減少し、近年は約 5,000 ~ 6,400 トンで推移している。表層漁業、はえ縄漁業を合わせた 2012 年の総漁獲量は 10,059 トンである。

資源状態

親魚資源量は依然極めて低い水準にあり、MSY 時の資源量 (B_{MSY}) の 20% 程度である。この 20 年間の加入量は 1950 ~ 1980 年水準よりも低く、特に 1999 ~ 2002 年級の加入は非常に低かったと考えられている。一方、2005 ~ 2011 年級の加入量は 1999 ~ 2002 年級より高いと推定され、また、航空機目視調査による近年の加入量指数や 2007 年以降のはえ縄 CPUE に上昇が見られるなど、未成魚の資源回復を示唆する情報もある。



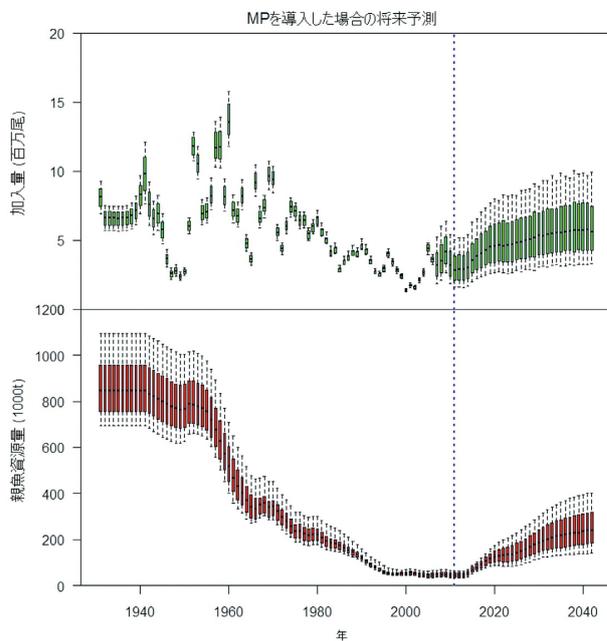
CCSBT で用いられているミナミマグロの成長曲線 (体長は尾叉長) 体長の各年代の曲線はそれぞれの年代に生まれた年級群の成長に対応する。1950 年代及び 2000 年代の成長曲線は 1960 年代と 1990 年代のものにそれぞれ等しいと仮定している。

管理方策
<p>CCSBTでは、例外的な事態が生じない限り、原則としてTACの決定は3年ごとに実施される管理方式の計算をもとに行われる。2012～2014年漁期のTACは、管理方式によって2010年のTAC(9,449トン)から増枠の10,449トン、10,949トン、12,449トンに設定された。加盟国への2014年漁期の割当は、日本3,361トン、オーストラリア5,151トン、ニュージーランド910トン、韓国及び台湾1,036トン、インドネシア750トンとなった。協力的非加盟国へは、フィリピン45トン、南アフリカ150トン、EU10トンが割当てられた。また、2015～2017年漁期のTACについても、管理方式の計算をもとに毎年14,647トンとすることが合意されている(2016年及び2017年漁期のTACについては暫定合意であり、2014年に実施予定の資源評価の結果等を踏まえ、確定される)。加盟国へは、日本4,737トン、オーストラリア5,665トン、ニュージーランド1,000トン、韓国及び台湾1,140トン、インドネシア750トン、協力的非加盟国へは、フィリピン45トン、南アフリカ150トン、EU10トンが割当てられている。ただし、いずれの漁期も、南アフリカへの150トンの割当てはCCSBTへの加盟が条件であり、加盟が遅れた場合は40トンが割当てられ、残りは加盟国に再配分される。</p>

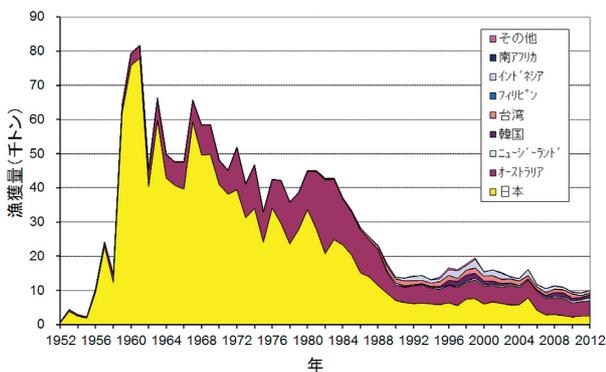
ミナミマグロの資源の現況 (要約表)	
資源水準	低 位
資源動向	親魚資源量は近年、横ばい。未成魚は増加しており、親魚資源量も今後増加の可能性が高い。
世界の漁獲量 (最近5年間)	9,281～11,395トン 平均：10,248トン (2008～2012年)
我が国の漁獲量 (最近5年間)	2,223～2,952トン 平均：2,576トン (2008～2012年)

資源評価まとめ
<ul style="list-style-type: none"> ■ 親魚資源水準は極めて低い ■ 1999～2002年級の加入が極めて低水準であるが、2005～2011年級はやや高水準 ■ 航空機目視調査指数やえ縄CPUEの上昇など未成魚資源の回復を示唆する情報も

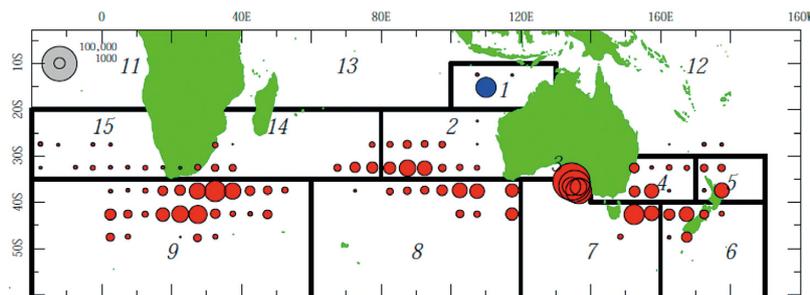
資源管理方策まとめ
<ul style="list-style-type: none"> ■ TAC 合意



2011年に資源評価モデルにより推定された加入量(上図)及び親魚資源量(下図)中央値、四分位点、90%点を示す。将来部分は管理方式を用いてTAC設定を続けた場合の予測。



ミナミマグロの国別漁獲量の推移



ミナミマグロの緯経度5度区画別の漁獲尾数

2011年暫定値。1～15はCCSBT統計海区。1海区の青丸はインドネシアによる位置不明の漁獲尾数。